

地域情報（県別）

【東京】全国でも少ないネット・ゲーム症外来「ニーズは高い」-宮田久嗣・平川病院副院長に聞く◆Vol.1

小中学生の受診が多く、7割に発達障害の傾向

2025年1月10日（金）配信 m3.com地域版

WHOが2019年、ゲームのやり過ぎで日常生活に支障をきたす「ゲーム障害」を国際疾病に認定してから5年。日本の医療機関でも徐々にこの問題に対応しつつあるが、専門的な治療を行っているところは全国でも少ない。精神科医療に注力する平川病院（八王子市）では依存症の治療を専門とする宮田久嗣副院長たちが2023年4月に「ネット・ゲーム症外来」を開設。「ニーズは高い」と運営の手応えを話す宮田氏に、外来の内容と患者層を聞いた。（2024年11月13日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら



宮田久嗣氏（本人提供）

38年半非常勤だった病院で副院長に

——病院のホームページによると、宮田先生は東京慈恵会医科大学を卒業した1983年、平川病院の非常勤医師として勤務を始めたとあります。以来、同院とはつながりがあったのでしょうか。

大学勤務を続けた医師としては珍しいと思いますが、1983年の8月から慈恵医大を定年退職する2022年3月までの38年半にわたり、週に一度こちらでも診療していました。当時の医局に学外の勤務先として平川病院を打診されたわけですが、奇遇にも現在の院長である平川淳一先生は同じ大学の一つ先輩であり、学内のクラブも柔道部で同じでした。なので、平川院長とはもう半世紀近くのお付き合いになります。

先生とのそんな関係もあり、2022年4月に平川病院の常勤医となり副院長に就任、現在も診療を継続している次第です。

——過去の記事によると、宮田先生が主動して2023年にネット・ゲーム症外来を立ち上げたとあります。全国でもまだ少ない専門外来だと思いますが、開設の経緯をお聞かせください。

私の専門はアルコールやギャンブルなどの依存症であり、過去には日本アルコール・アディクション医学会の理事長を務めました。そのような専門性を生かしつつ、病院として現在の社会ニーズに応える活動ができないか考えたんです。当院は精神科病院としてアルコール依存症の専門病棟があることが特徴ですが、一方で近年の精神科領域ではギャンブルやインターネット、ゲームなどに没頭する行動嗜癖が問題となっており、専門的に対応している医療機関が全国でも少ない状況です。

「今の時代を踏まえた地域貢献を果たしていこう」と平川院長も後押しをしてくれ、専門外来の開設に向けて動き始めました。依存症の治療は医師一人ではできず、多職種によるチームで行いますが、幸いにも他の専門職の方々が私たちの構想に興味を持ってくれ、精神科医である私の他、公認心理師や作業療法士など8人ほどのチームをつくることができました。当院は依存症の治療に専門性があるため、体制を築きやすかったように思います。

公認心理師と協力して初診「丁寧なヒアリングが重要」

——ネット・ゲーム症外来の初診は予約制で、毎週月曜日の午後に行っているとあります。流れをお聞かせください。

ネット・ゲーム症の診療も初診に十分時間を取ることが大切であり、月曜午後に1人のみ、と決めています。流れとして、まずは公認心理師が患者さんや親御さんから相談に至った経緯を1時間ほど丁寧に聞き取り、その後、私が30分から1時間ほど診察します。

公認心理師が聞くのは、患者さんが好んでいるゲームの種類や内容、プレーしている時間、親との約束事やそれを守れているかといったことのほか、発育の過程や、学校・職場への適応状況、ご家族との関係なども詳しく伺います。多くの場合にヒアリングを終えた時点で十分に情報が取れているため、私の役割はどちらかということを受けただ交通整理のようなものになります。どのような治療が望ましいかなどを話し合い、ご提案します。

——親から相談を受けるということは、患者は子どもが多いのでしょうか。

多くが小学生と中学生です。外来を開設した2023年4月から2024年10月までに50人ほどを診察しましたが、2024年に入ってからは一層、低年齢化が進んでいます。2024年に診た初診35人ほどのうち約4分の3が小中学生であり、大学生以上はわずかでした。

相談者は親がおよそ半数を占めますが、学校に配属されているスクールカウンセラーや保健所、放課後等デイサービスの職員からもご相談いただいています。私たちチームは専門外来の活動を知ってもらおうと八王子市の保健所で講演や相談会を行い、市民公開講座を開催したり、タウン紙の取材にも応えたりするなど啓発活動を定期的に行っており、相談の間口は広がってきています。

多くの子どもが不登校、発達障害の治療も重要

——相談内容としてはどんなものが多いのでしょうか。

ネット・ゲーム症外来ではオンラインゲームなどの各種ゲームとSNS、YouTubeなどの動画配信を対象に、「夜遅くまで没頭して朝に起きられない」「食事をしない」「ゲームの勝負に負けたりゲームを止められたりすると怒って物を壊す」「課金するために家族の金品を盗む」など、当事者の日常生活や家族に影響が見られるときに相談を受けています。

相談内容のキーワードは二つ挙げられます。一つは「熱中する、熱中しすぎる」。もう一つが「学校に行かない、行けない」。これまでに受診した児童・生徒で学校に行っている子はほとんどいません。患者である子どもたちはそれぞれに生きづらさを抱えており、学校生活に適應できないことから深夜までゲームに没頭し、朝に起きられなくなってさらに学校に行けなくなってしまふ——という悪循環に陥っているケースが目立ちます。

——患者の子どもたちが抱えている「生きづらさ」とは、どんなものなのでしょうか。

子どもにとっての社会は家庭と学校がほぼ全てを占めるため、そこで何らかの問題があると、逃げ道としてネットやゲームにはまる可能性が高まります。「生きづらさ」には家庭内の不和やいじめなどが挙げられますが、最も多いのは自身の特性に起因するもの、発達障害である注意欠如多動症（ADHD）と自閉スペクトラム症です。

ADHDの子は授業中にじっとしてられない、忘れ物が多い、感情をコントロールするのが苦手がかつとしやすいなどの特徴があります。このため、親や学校の先生から繰り返し注意されることになりませんが、それだけでは直らないため、「直す気がない」と叱責されて、学校に行くのが嫌になってしまうケースが見られます。一方、自閉スペクトラム症の子は周囲の空気を読むのが苦手で集団行動を取りづらく、「協調性がない」と批判されたり、いじめの対象になったりして学校生活からドロップアウトしてしまうことがあります。

当外来の場合、子どもの患者さんのおよそ7割に発達障害の傾向が見られるので、ネット・ゲーム症の専門的な治療プログラムを提供すると同時に、発達障害の治療を並行して行うことが大切です。生きづらさの原因にアプローチせず依存症の治療だけをしてもうまくいきづらく、逆に発達障害の治療をきちんと行えば、依存症の治療を本格的に行わなくても改善に向かうことが少なくありません。

◆宮田 久嗣（みやた・ひさつぐ）氏

1983年東京慈恵会医科大学卒。2011年同大精神医学講座教授、2022年同講座客員教授。同年、平川病院の副院長となり2023年にネット・ゲーム症外来を開設。アルコールやギャンブルなどの依存症が専門で、日本アルコール・アディクション医学会の理事長も務めた。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

